パネルディスカッション・質疑応答

司会（尾崎先生）：お待たせいたしました。限られた時間ではありますけれども、これからパネルディスカッションに移らせて頂きたいと思います。

ディスカッションは、本日ご発表の橋本弘道先生、宮崎展昌先生、上野正人先生、鮫島良一先生にお願いいたします。ディスカッションの司会は私、尾崎が務めさせて頂きますのでよろしくお願いいたします。

それではディスカッションに先立ちまして、まずご発表頂きました各先生方に、言い足りなかったこと、そしてそれぞれの先生方のお話を聞いた上での補足的な御意見をお願いしたいと思います。最初に橋本先生、よろしくお願いいたします。

橋本先生：今回、改めて学園の歴史を振り返りましたが、四年制大学設立までに、かなり苦労していることが分かります。学園が、財務的な余裕のない状況で、自分たちの理想とする教育をしていくために、大変な努力をして学園を作り上げていったことが分かります。ですから、私たちはその思いをしっかりと受け継いでいかなければならないと思います。それを、今回、改めて資料を見直しながら思いました。

それから、新井石禅禅師と中根環堂先生との関係ですが、今回、宮崎先生から、事前に調べたことを聴いたり、整理された本日の発表を改めて聴いたりしたことで認識を新たにすることができました。新井石禅禅師の存在とい

うのは、学園にとっても中根環堂先生にとっても、とても大きなものであったということが認識できました。その意味においても、今回のシンポジウムは、私にとって有意義だったと思っています。

司会：続きまして宮崎先生、よろしくお願いいたします。

宮崎先生：私の方は時間切れもあって話せなかったこと、差し出がましいようですが、提言的なこと話したいと思います。

これは橋本先生が最後の締めくくりでもおっしゃっていたことに通じることですけれども、現在の「建学の精神」、これはほぼ全ての私立大学において、おそらくは文部科学省の指導もあって、建学の精神を掲げております。本学でも、この「大覚円成　報恩行持」という、中根先生が掲げられた二大眼目を「建学の精神」としております。このことは私も振り返らせてもらったように、戦後より堅持されてきたものですから、私は変更する必要はないと思っています。

また、私も「宗教学」の授業で大覚円成・報恩行持の意義や背景、曹洞宗との関係も説明します。本学の「建学の精神」は実に仏教的な言葉であり、仏教思想をそのまま反映した標語です。学生は大学に入って初めて仏教を学ぶような方が多いので、噛み砕いて説明しますが、私がいつも授業で説明するときは、これは人生的なテーマであり、人生を通じて、堅持して行くべきような標語であって、学生生活の四年間、あるいは、二年間、三年間といった短期的なことでは、あまりに長大すぎる目標だと思います。

この「大覚円成　報恩行持」を噛み砕いて説明するときに、これはずっと一生涯持ってほしいものだっていうふうに、私は説明しますけれども、もう少し学生にも身近に感じてもらえるようなもの、私も紹介したように、中根

先生は二大眼目「大覚円成　報恩行持」を掲げつつも、その下にも、四大標語、五大標語、戦後には八大目標というように、もう一つ、あるいは二つ、三つというふうに標語を掲げられて、随時変更された歴史が、私の発表の中でも提示できたかと思います。私は、もう少し具体的で、学生にも説明しやすい、身近に感じてもらいやすい目標を設定することをしてもいいのかもしれないと感じています。

わたくしのような一教員が言うべきようなことでもありませんし、大学という性質上、学部・学科に分かれていますので、おそらくは、学部ごとに設定すべきかとも思います。本日、資料を持ってこなかったのですが、どうやら歯学部では、何年か前の資料を見ると、歯学部独自の標語があったようです。そういったように、文学部だとか、あるいは短大部の保育科だとか、あるいは歯科衛生科、そして歯学部でそれぞれ独自に標語を掲げて、私はこの「大覚円成　報恩行持」という建学の精神はきちんと掲げつつ、よりそれを具体化していけるような標語を学部の先生方で検討していただいて行った方が私はよいのではないかなと思います。

なぜこんなことを申しますかというと、これは自らへの反省というか、今現在の我々への反省もなるのですが、以前からあったものをそのままスルッと受け取って、それだけをしていればいい、というそういう態度を私はどうかと感じています。先ほど橋本先生も最後の締めくくる時おっしゃいましたけど、現代は変化がかなり激しい時代であるのに、五十年以上も前に掲げられた「二大眼目」を単に奉っているだけでいいのかということです。もう少し現代の様相に合わせて、そして、学生たちが理解可能なものを掲げていくことを提案したいと思います。私はそういった立場にない研究所所属のものですが、長年のその受け継いできたものをより具体化・実現化し、そして学生にもっと身近に感じてもらう、そういう工夫をして行く必要があるのではないか、というふうに感じました。

私、今回発表をまとめていく中で、中根先生も戦前の流れでご自身の多分一本筋が通っていて、時代に合わせて文言を変えながら条項を増減させながら、それでもきちんと筋を通して、標語を建てられていました。その姿勢は

見習うべきものがあるのではないかと私は感じました。中根先生は教育者として生徒第一に考えられて、生徒ファースト、学生ファーストだったと思います。実際、自分は仏教学の研究しかしてきませんでしたけれども、今回こういった教育のことを勉強させてもらって、その観点でいろんな先生の著作も見ました。水野弘元先生という世界的にも高名な仏教学者がいますけれども、その先生が書かれた仏教教育学の書籍が残されていることにも改めて気が付きました。水野先生は駒澤大学の学長も務められた先生ですが、そうした先生も、やはり教育に関して、仏教は応用が利くっていうこともおっしゃっています。

私は、実は、仏教学の研究をしながらですが、一時期、仏教はオワコン、役に立たないものかもしれない、と感じることもありましたが、やはり、そうではないと思います。仏教は「人間」を正面から扱っていますので、「人間とは何か」と考える上で仏教は重要なものだと思います。生成ＡＩというものが最近登場し、ものすごい勢いで社会が変わってきています。そこで、人間とは何かということを考えなきゃいけない時代になっています。その時に仏教は大きなヒントになると思っています。二千五百年前からある教えですからですから、仏教を根幹に据えた「建学の精神」を掲げる本学、本学園は、ある意味、有利だと思いますし、それにしっかり基づいて、もう少し具体的なものを考案し、学生たちにもより身近にその仏教精神を感じてもらえるようなことをしていければいいのではないか、というふうには感じています。

少し、長くなりましたが、以上です。

司会：続きまして、上野先生よろしくお願いいたします。

上野先生：周りに大学の先生方が居りまして囲まれている状況で、中・高の教員としては、本日この場に来てよろし

かったのかなとちょっと思うところではございますけれども、しかし、現場で、私学の教員を長くやっておりまして、とても愛着のある学校でございます。学校を広報ＰＲして生徒を集めなくてはいけない私学ではあるのですけれども、私学にはそれぞれのカラーがございます。公立の画一的な教育とは違いまして、それぞれ特色があり、それぞれのカラーを持っております。やはり変えてはいけない部分っていうのが必ずあって、時代のニーズに応える形の中で変化はもちろん構わないのだけれども、基本的なところでは変わってはいけないものってあると思います。やはり創立者は中根環堂先生ということの中で、やはり守るべきところは守り、そして時代のニーズに応える形で変化させていくところは変化させていくということだと思います。

現在「学校案内」も外に置かしてもらいましたけれども、生徒を集めるにあたりまして、本校は三本柱を立てております。それが「学力向上」と「人間形成」とそして「国際教育」、これが三本柱になっています。あえて今日の私の話の中に、三本のうちの二本を置いてきました。やはり「人間形成」というこの真ん中にあるその柱を中心にして、それから「社会のニーズに合わせて変わっていく部分」、だと言うふうに思っているから、今回は「人間形成」の部分だけに焦点を当てまして、お話をさせていただきました。

大学の先生方には感謝するところがたくさんございます。やはり現場では中々分からないところを客観的に見ていただきまして、色々アドバイスをいただいたり、また色々調べていただいたり、そしてまた図書館のそういった残っているものをデジタル化して下さったりだとか、本当に感謝しております。これからも是非是非よろしくお願い致します。

司会：最後になりますが、鮫島先生よろしくお願いいたします。

鮫島先生：橋本先生からは歴史の詳しい話をお聞かせ頂いて、宮崎先生から文献の研究を聞かせて頂いて、上野先生からは学校生活や行事のこと等を教えて頂きました。私の方はどちらかというと臨床で、子どもと共にいる中で感じたことということが中心になったのですけれど、やはりこの四つの要素を実は一緒に考えるというのがとても大事なように思えます。何か理念だけのことでもなく、やはり現場の子どものことや学生のことであったり、或いはそれがどういうふうに成り立ってきて、未来にどう繋ぐか、まさにこういう少し分野が違いますけれども、そういうものがこうやって一堂に会して話をさせて頂く機会が出来たのはありがたいと思っております。私としましては、人間が生きるという原点のことを、どういうふうに私たちが考えるかということを中心に据える必要があると思っています。小さい子どもと関わっていきますと、「生きているっていうことの本当の姿」みたいなものに出会えて、自分が小さい時どうだったのかなとか考えたりします。ある若い保育者は子どもと一緒に種を植えて芽が出て大喜びして、私が「あなたは植物好きなの」と聞いたら、「これまであまり興味なかったけれど子どもと植えて芽が出たら嬉しかったんです」と、まるで今まで自分が生きてきた中でスルーしてきた出来事と子どもを通して出会ったと言わんばかりです。改めて、この「人が人を育てる」というのは、私たち自身がそこに何を学べるかということに大きな意味があるように思います。そういうことと仏教の考え方であったりするところをどういうふうに繋げていくかということを大事にしたいと思います。以上です。

司会：はい、ありがとうございました。それでは続きましてそれぞれの発表を御聞きした上で、今回のシンポジウムの企画を行ないました橋本先生の方から、それぞれの先生に対しまして何かご質問、ご意見も含めて結構ですが、何かございますでしょうか。

橋本先生：はい。今のお話を聴いて、新たに思ったこともあるのでそれについて少しお話しできればと思います。宮崎先生から、二大眼目である「大覚円成　報恩行持」を堅持しつつも、さらに、学部学科にあった標語のようなものを作っても良いのではないかという提案がありました。私もそれについては賛同します。

私も含めた宗教学を担当している教員は、建学の精神や教育理念をどうやって学生に伝えれば良いのかということについて、日々苦労をしています。中根環堂先生も、自分は話すことは苦手ではないけれども、生徒に分かりやすく話すのは本当に苦労するというようなことを仰っていたようです。

「大覚円成　報恩行持」については、その中に様々な意味が含まれていますので、これを分かりやすく表現しようとすると、そこに含まれている意味が抜け落ちてしまう危険性があるようにも思います。ですから、二大眼目の具体的な意味について、標語などで補っていくという考え方も有効だと思います。

私は、現在、保育科で宗教学や仏教保育を教えています。その授業の中で二大眼目にも当然触れるのですが、学生には、「大覚円成」の「大覚」は、お釈迦さまの悟りであり、それは、お釈迦さまにとっての人生上の目的でもあったわけですから、保育科の皆さんにとっての「大覚円成」は、まずは、しっかりと幼稚園教諭免許状と保育士資格を取得し卒業するという意味に解釈すると分かりやすいかもしれませんねと話しています。そして、保育者として世の中に出て活躍することが、「報恩行持」ということになりますねと言っています。随分と近視眼的な話にはなってしまいますが、学生には、そういう糸口でこの二大眼目を一旦引き取ってもらって、人生を経ていくうちに、自分に取っての「大覚円成」とはどういうことであるかということを、問いかけ続けてもらえればなと思います。そして、それが、世の中に対する「報恩行持」につながってくれればと思います。

それから、中根環堂先生がよく仰っていた「一点になりきれ」ということについても、考えてみたいと思います。多分、私たちの世代よりも、これからを生きる子どもたちの方が、世の中の変化が激しくなっていくように思いま

す。そうなると、人生において、すごく不安になるような場面もでてくるのではないでしょうか。もしかすると、場合によっては、私たちよりも様々な「苦」を抱え込まなくてはならない人生になる可能性もあります。その時に、やはり、「日日是好日」という言葉がありますが、一日一日を大切にしていく、一日一日を幸せに感じていく、その延長線上に豊かな人生があるというような考え方をしていった方が良いという時代になるかもしれません。先が見えないということは、その先の見通しが立たないということでもあります。そうであれば一日一日を大切に生きていくというふうに過ごしていくことも、生きていく上での大切な智慧になっていくように思います。ですから、中根環堂先生が仰った「一点になりきる」という言葉の意味は、本来の意味とは多少ずれるかもしれませんが、この瞬間瞬間を大切にしていくことが未来につながっていくという意味で、未来を生きる子どもたちにとって、とても大切なこころ持ちになっていくように思います。これまで以上に、初代学園長である中根環堂先生や二代目学園長である三澤智雄先生が仰っていたことが、重要になってくる時代に入ってきているのではないでしょうか。

三澤先生が仰っていた物心両面の充実した学園にしていって欲しいという思いについては、先ほども紹介しましたが、物質的な面で充実していても、それが精神的な幸せにつながるとは限らないということを私たちはだんだんと気付き始めているように思います。世の中には、ミニマリストと呼ばれる人たちがいて、なるべく物を持たず最低限の物で済ませて生きていくことを選択したりもしています。

これからは、新たな価値観の中で、私たちの世代と全く違う生き方を選んでいく人たちがどんどんと増えていくのだと思います。ですから、本学で学ぶ人たちが、自分自身にとっての幸せについて考えていく上で、「大覚円成報恩行持」という言葉の意味は、その都度その都度、大きな意味を指し示す存在になっていくのではないかと思います。

司会：例えば、上野先生は四十年お勤めと伺っています。女子高の時代、さらに共学に移行したという中で、どのような変化があるでしょうか。そういうものも一言では言えないと思いますけど、仏教教育も含めて、お感じになっていることをお話いただければと思います。

上野先生：はい、女子高校の時に集まってくださっていた生徒さんと、共学になってきてくださるようになった女子とは、少しタイプが違うところはあるかと思いますけれども、しかし、どの時代においても、やはり生徒は、本校を選んで入ってきた、そして、その「建学の精神」なり、「教育理念」を理解して入ってきた、ということにおいては全く変わりません。「本校の日々の行持」、これを生徒たちは、どの時代の生徒もちゃんと心から受け入れてくださいまして、本当によくやってくれます。

「黙念」って言えば、もう自然と「黙念」をする。あの～強制することなく「黙念」しようと言えば「黙念」して、自己と向き合ってくれると言うような生徒ばかりでございます。やはり今、橋本先生からも話がありましたけれども、「禅の精神」を大切にしている学校で、やはり「禅」、これはシンプルなものなんじゃないかなと思います。漢字を見ても示編に単純の単ですから、……もうシンプルに、余計なものをそぎ落とす。もう～まっさらな自分になる、誰もが持っているその「仏心・仏性・善い心」を見つめる。そういったところから始まっている本校ですので、朝から「黙念」し、帰りに「黙念」をする。この学校生活の中で、「自己と向き合う時間」というのを、うちの生徒はたくさん持っております。朝二分、帰り一分として、一日三分自己とこう向き合うのです。でそれが、週六日ですから三×六＝は約二十分ですよね。月に四週ということで計算して行きますと相当の時間、自己と向き合う時間を作っています。でこれは生徒によく言いますし、生徒もよく分かっていまして、やらされていると思っていたら無駄な時間ですけれども、自分と向き合う時間をいただいている、そう思って生徒はやってくれますので、この時

間が無駄ではないのですね。今日は、「国際教育」だとか、あるいは「学力向上」の話はしてはいけないと思って来ているのですけれども。今、進学実績がちょっとのぼり調子です。それはやはりここのところに来て、コロナ明けで、また一からスタートしていこうと、元の形に戻していこうということの中で、もう一回、この日々の我々の「行持」というのを、教員の方も生徒の方も見直しています。そんなところから、やはりその「自己を見つめる時間」ということの大切さというのを、生徒も本当にわかってきていまして、併せて「ジャイロ手帳」、大人の言うシステム手帳みたいなものをうちの生徒になると持たされまして、ちゃんと「ノートで自己分析・自己理解」をするわけです。この日々の「黙念」と「手帳」で、その両方で両輪のようにですね、自己を知るということの時間を大切にしていまして、そういったことが「学力向上」や何かにも繋がっているのかなと分析をしているところです。やはり「自己を見つめる時間」というのは大事であるということではないかなと思っております。

司会：ありがとうございました。ただ今の上野先生のお話は、会場の方から質問がありました「建学の精神を生徒たちが、どのようにどのくらい理解しているか」ということの答えになったのではないかと思います。

時間もあまりございませんので会場の方々からいくつか質問をお受けしていますので、そちらを紹介させていただきます。鮫島先生にご質問です。「子供が四歳になると死について考えるようになる、とお話になられましたけれども、これは何か資料とか具体的なデータがあるんでしょうか」、と言うご質問でございます。

鮫島先生：非常に現場の感覚な部分が多いです。ただ3歳で幼稚園に入ってきて、だんだんと人の関わりができて、思い通りに行かないと言うことがたくさんあったり、あるいはテレビからのニュースも見たり、いろいろする中で遊びの中でも「きわどい遊び」というか、残虐性を一部秘めたような遊びもいっぱい経験するわけです。虫が死ぬ

とかいうこともありますし、嫌なことをやられたっていうのもある。でもある種、一方に生の喜び・生きる喜びみたいなのがいつも危険と裏腹であるということが彼らは感覚的に身についていっているなと感じております。

司会：ありがとうございます。これは会場からの質問ではございませんけれど、宮崎先生は先程『鶴の林』などをデジタル化しているという話でした。上野先生からのご指摘がありましたけど、この事業についてどのような段階になっているか、簡単にお示しいただければと思います。

宮崎先生：はい、現在のところ、撮影を進めている最中です。その撮影をしたものを、仏教文化研究所の方で、デジタルアーカイブと言いまして、要するに、画像のかたちで公開して行く予定です。ただ、中身に関してはすべて公開するわけには参りません。著作権の関係があります。例えば、生徒たちの詩集・文集などが載っています。それはおそらく著作権が問題になるので、著作権に触れない範囲、あるいは個人情報に触れない範囲で、中根先生の巻頭言、あるいは学園の記録的な部分、そういった部分を中心に公開していければと考えています。

橋本先生もおっしゃっていたように、戦中・戦後の酸性紙は劣化が激しいです。ですから、できる限りデジタルのかたちで保存をして、それを公開し、本学園の歴史を広く知っていただく機会にしたい、と考えております。

司会：ありがとうございました。上野先生にご質問です。「總持学園は百周年と言うことでありますが、どれほど卒業生がいらっしゃるのか、また卒業生の業績、有名な方などがいらっしゃるか」、という質問でございます。

上野先生：卒業生の数ですが、大変申し訳ありません。把握しておりません。ですが卒業証書のところに、番号がず

っとふってあるかと思うのでその最後の番号がいくつなのか、確認してくればよかったのですが、少し分かりません。ただ相当の数と言うことに尽きるかと思います（事後調べ：五〇〇〇〇人近くの卒業生を輩出）。現状を報告しますと、中学校の方が一学年四クラス最大三十六人クラスでございます。高校のほうが年によって違うんですけれども基本的に七クラス、今の高一は九クラスございます。そのぐらいで今だいたい一〇三〇人ぐらいの本校生がおりますけれども、昔はですね、大変多かったです。クラスが一学年、中学校で七・八クラスになります。高校になりますと英・孝・仁・敬・貞・正・恭・愛・礼・和・信・恩・明・徳・円・修・順・律で、えっと十八クラスが一学年でありましたので、全校生徒が三六〇〇～三八〇〇ぐらいの時期もございますので、相当の数ではないかと思います。

その中で有名な人がいますかということですが、かなりの大先輩の方になるんですけれども、郷静子さんという芥川賞を取った作家さんがいらっしゃいました。それから小山内美江子さんと言いまして、金八先生の脚本を書いている方がいらっしゃいました。その小山内さんが同窓会長も務めてくださった時期もございました。その時お話した時に「うちの学校がモデルになる時もあるのよ」なんて話を聞いた時は大変嬉しく思っておりました。

司会：ありがとうございました。時間も迫ってまいりました。最後に一言ずつで結構ですので仏教を通して園児、生徒、学生に伝えたいこと、沢山お有りだと思いますが、一つだけ、一言で何がありますでしょうか。まず、橋本先生、よろしくお願いいたします。

橋本先生：学生に伝えたいことを一言でというのは難しいですね。仏教保育の授業では、菩薩行について取り上げています。保育の仕事というのは、まずは、子どもたちのいのちを守るということが第一で、さらに、常に子どもの

視点に立つことが大切だと伝えています。当たり前のこととといえば当たり前のことなのですが、そのような心構えが仏教で言う菩薩行につながるのだと思います。ただ、その菩薩行の前提には、内面からあふれ出る慈悲心のようなものがあるように思います。ですから、その慈悲心ということを、十五回の授業を通して、自分の人生観の中に取り込んでもらえればなと思っています。

それから、お釈迦さまが亡くなるときに、諸行は無常であるので自分も入滅する。これからは、自らをよりどころとし、他をよりどころとせず、私の説いた法をよりどころとして、他をよりどころとしないようにと仰ったと伝えられています。法は保育の専門知識に喩えることができると思いますので、自分の考えと、保育の専門知識の間を行ったり来たりしながら、偏りのない気持ちで、常に自分の保育は正しいんだろうか、大丈夫だろうかということを確認しながら良い保育者になってくださいねと言っています。それらが学生に伝われば良いなと思っています。

すみません、一言ということでしたのに、ちょっと長くなりました。失礼しました。

宮崎先生：私も釈尊の最後の言葉ですね。末期でおっしゃったという言葉、「すべての事象は移りゆくものである。怠ることなく努力（修行）を続けなさい」とおっしゃったあとに釈尊は亡くなったとされています。これは本学の建学の精神「大覚円成」にも通じることでして、要するに、

生きている限り、人間というのは不完全な生き物だからこそ、成長を続けていけるような努力を続けなさい、という言葉だと私は思っていて、学生にも、お釈迦さんの生涯を説明する時に必ず伝えますし、これはもう仏教のエッセンスだと説明します。そして、本学の建学の精神も通じる言葉として、覚えておいてね、というふうには必ず言うようにしています。きちんと授業を聞いている学生はごく一部かもしれませんが、その言葉は多少なりとも響くようです。私は、授業でリアクションペーパーを集めていますけど、何名かは、「なるほどなと思った」というよ

うにコメントを寄せてくれています。私は授業で教えながら、一人でも二人でも、そういう言葉が心に残ってくれたらいいな、と思って伝えていくことをしています。以上です。

上野先生：『私達の学園』と言う本校の新入生に配る冊子があります。ずっと毎年配っていくわけですけれども、古いものから今に至るまでずっとこう読み返しても、やはり中根環堂先生のところから始まりまして「禅の精神」に関してずっと触れられていて、先ほども紹介しましたけれども、道元禅師様の「只管打坐」、瑩山禅師様の「平常心是道」とこれはなくなっていません。ずっと残っている言葉です。やはりそこに基づいたところの「黙念」というのは、坐禅の一つですけれども、しっかりと「自己と向き合う時間」を大事にすることによって、本来の自分を自分自身で見出して行く、いろんな流れの中で、それに対応できる本来の自分の姿というのを見出していくっていうところだと思います。そういったものがちゃんとできることになって、「自己を見つめる」ことができるようになって、いろいろなことが発展・進展して行くのだと思います。まずは何と言っても、「自分をしっかりみなさい」ということ、そして、「今一番大切だと思うことを一所懸命やりなさい」、「今ここ、今ここ」、これをしっかりと生徒には伝えていきたいと思っております。

鮫島先生：今の言葉を引き取って、幼稚園の小さい子に当てはめますと「思い切り遊びなさい」ということでしょうか。一生懸命遊びなさい、つまりは自分のやりたいと思ったことを精一杯やれるような、そういう環境を作っていきたいと思っています。それは実は、人間を大事にする、ひとりひとりを大事にするということの原点だと思います。今、若い人たちはＳＤＧｓであったり、自然や生き物との共存であったり、多様性の問題に対しても大変関心を持っています。やはり大事にされる大事にし合うというような、そういう共に生きる共生の思想が仏教には非常

に豊かにあると思います。ただ一方で、合理主義みたいな考え方がどんどんはびこっているので、役に立たないものは切り捨てられるような、そういうことが本当にないように「君は君で良いぞ」という事を子どもたちに伝えて行きたいと思っています。

司会：ありがとうございました。以上もちましてディスカッションを終了いたします。先生方、大変お疲れ様でございました。